

見えない後ろに不安感

お風呂で髪の毛を洗い、うっすら目なんかつぶってしまおうと「出やしないよ」と思いながらも無防備な背中に、言い知れぬ恐怖感が漂う。河鍋暁斎の「暁斎百鬼画談」にある、羽織を深く頭まで覆う人や布団に潜り込みながら怪談話を聞く「百物語」の場面を見ていたら、そんな子どもの頃の記憶がよみがってきた。



▲怖い話では背中を隠す(『暁斎百鬼画談』より)

話など、背後が安心できないのは、各地の民俗にもみることができ、古河でも「ムジナは背後からついてきて人をだますのだ」と伝えられている。

そんな背中を、何かで包むことで、悪しきものからの防御ラインをつくり、安心感につなげようとしていたのでしょうか。

魂が出入りする着物の背中

しかし、普段から私たちは背後に恐怖感を感じているわけではなく、たいてい何か不安になることで、幽霊や妖怪などの非日常を背中に想像してしまうもの。

そうした心が不安定な状態においては、起こりうる危機感に対して、私たちはおまじないという方法で対処してきました。例えば、魂の安定しない新生児の着物には、背守りといって麻の葉模様の刺繍や、特別な色をもって縫い目を入れて、魔除けとしていました。これはかなり一般的に行われており、明治時代の裁縫の教科書にも、その縫い方が示されている

ほどです。

また、良きにつけ悪しきにつけ、魂は着物の背中から出入りすると考えられていたようで、死者の白装束の背中に縫い残しをしておく地方もありました。これは、あの世へ行くときに、魂が抜けやすいようにという願いを込めたものだと思います。

先祖を背負って作柄を見るお盆

ところで、茨城県西地域の生活誌を作品に描く長塚節が、お盆の習俗を題材に、こんな俳句を作っている。

「うつし世の秋のみのりを行きめぐり見さす仏に笠たてまつる」

盆の14日、うどんを打って、その切り端を笠の形に折り、翌朝、先祖の霊がこれをかぶって田畑を見て回るといった情景のようです。古河でもかつてこんな風景が見



▶明治時代の裁縫教科書で紹介する背守りの例(『裁縫教科書』より)

受けられたようで、盆に帰ってきた先祖の霊を背負って作柄を見て回った「野回り」という習俗があったと、明治44年生まれのお古河から伺ったことを思い出しました。ところで先祖の霊ってどんなふうにして背負うのだろうか？

そのとき頭に浮かんだのは、足尾銅山鉱毒事件によって、古河へ移転してきたお宅で聞いた、谷中村から背負ってきたという先祖の墓石の話。わざわざ大八車などに乗せず、背中におぶったという話は、石の重量からすると本当かどうか分からない。しかし、大切な先祖を背中におぶってきた話は、背中に私たちに託って重要な体の一部であり、私たちを守る神霊がそこに宿るということを、なんとなく想像させてくれるのです。

今や髪の毛を洗う度に、大量の抜け毛に恐怖感を感じるお年頃となってしまったアタクシ。こればかりは後ろから守ってくれない。むしろ視界に入らないがため、後ろがキケンなのかも。

古河歴史博物館学芸員 立石尚之

【児童書】

橋の上の子どもたち

パドマ・ヴェンカトラマン 作
なにも持っていない。でも心がある。ホームレスを選んだ11歳の少女のほこり高き物語。インドで子ども時代を過ごした著者が、実際に子どもたちが体験したことをもとに描く。

出版社…講談社

【一般書/随筆】

生きるコツ

姜尚中 著

人生の曲折を経て、私は身の文の豊かさによって叶えられる平穏な生活があることを発見したのである。どんなプロセスを経て「平穏の文化」にたどり着いたのか、それはどんなものなのかをつづった「後半生」の生き方論。

出版社…毎日新聞出版

図書館の本棚から



古河図書館

【一般書/小説】

小説 秋月鶴山

童門冬二 著

「下意上達」の組織作り、世界初の児童手当、理想の藩校の設立…。上杉鷹山が尊敬し続けた兄で、何よりも「人」を大事にした名君、高鍋藩7代藩主・秋月鶴山(種茂)の生涯を描く歴史小説。

出版社…PHP研究所

【児童/絵本】

ああ、アジのひらきが

たべたいっ!

かねまつすみれ 作

魚屋さんの店先に干してあったアジのひらきを狙っていたのに、しましまのネコに横取りされてしまったネコのおいら。アジのひらきで頭がいっぱいになってしまって、なんでもかんでもアジのひらきに見えてきて…。

出版社…文研出版

自分の世界を創る

梅野愛菜さん 古河第一中学校3年生

私の将来の夢は小説家になることです。自分の目の前にあるものを一つ一つ丁寧に柔らかく表現して、読者の心の支えになるような小説を書きたいです。

小説家になるからには、人気が出る小説をたくさん書いて、自分が表現した世界に多くの人々を巻き込んでいきたいです。また、国籍などを問わず、さまざまな国の方と出会って自分の世界を広げ、全世界の人に伝わる小説を書きたいです。そして、小説家として、言語の壁を越えて世界との架け橋になりたいです。

